

書 評

Receiving Woman ; Studies in
the Psychology and Theology of
the Feminine, 1981
by Ann Belford Ulanov

伊 藤 良 子

今、女性は、自らの言葉で、女性自身を語る道を模索しだしている。ここに
取り上げた Receiving Woman; Studies in the Psychology and Theology of
the Feminine, 1981 もその先駆けの 1 冊と云えよう。本書の著者、Ann
Belford Ulanov は、receiving woman という言葉で、具体的な、個としての、
生きた女性を表現しようとしている。彼女によれば、receiving woman とは、
自らを受け入れ、自らが受け入れられ、そして他なるものを受け入れている女
性である。そこには、高度に男性化されたアメリカ社会において、牧師として、
また心理療法家として、苦しむ者と共に歩んできた女性である著者の、体験か
ら生まれた女性像が読みとれよう。では、それはどのような女性であろうか。
本書に従って見て行くことにしよう。

まず著者は、どのようなものであれ、ステレオタイプな女性イメージを拒否
する。すなわち主婦という古きステレオタイプも、また、フェミニスト、政治
活動家、キャリアガールといった新しきステレオタイプも、いずれも女性の一
部分を抽象化したものにすぎないとして拒否している。receiving woman は、
具体的な個として、自分自身のすべてを受け入れたいと思っているのである。

しかしながら、女性には、自分の性をどう生きるかについて 3 つの迂回路が

あると著者は云う。そのどれもが以下のような袋小路にぶつかる。

第1の迂回路：各々の性に予めバックされた心理学的特徴や社会的役割、法的規定に当てはめられた道——ここでは女性は、優しく柔和であるという、女性的な象徴だけを押しつけられ、それに反する特質はすべて切り捨てられる。従って、女性は社会に出て行く道を閉ざされ、男性の求めに応じる、いわば、自動販売機のような存在となる。

第2の迂回路：男女の性差に基づくすべてのイメージを憎悪することから生じた道——ここでは、男女の対極化した性イメージは悉く排除される。従って、女性は第2の男性、すなわち、男性の模造品、二級品となる。それは女性の感覚や男性との身体的な相違といった明白な事実を否定することになり、これらが無意識に抑圧されていると、いつか無意識からのしっぺ返しが生じる。

第3の迂回路：両性具有になる道——ここにもまた、我々の身体の相違や我々を条件づけている文化的イメージを無視した両性的化合物が生まれる。

以上著者のあげた第1、第2の迂回路が問題を孕んでいることはすでに多くの人々に気付かれている。ここで我々は、第3の迂回路に注目しておきたい。今日、米国のみならず、我国においても、男女共に中性化が進んでいる。すでに、Singer, J.は、これを先取りした形で、新しい時代の指導原理として、「男女両性具有」(1976)を唱えている。この魅力的なテーマは、日本語にも訳出されている Singer の著書に譲り、この現象をどのような視点から捉えうるか、もう少し Ulanov の言葉に耳を傾けよう。

3つの迂回路は、男女両性が敵対的に対極化した結果であると考えられる著者は、問題は性の対極的イメージを受け入れるのではなく、投影することから始まっていると云う。自分のすべてを受け入れたいと思っている receiving woman は、これらの投影を自らに引き戻す。彼女は自分自身の中に男性的要素も女性的要素もあることを知っており、それを他者に投影することはしない。その時、投影に用いられたエネルギーはすべて彼女に戻ってくる。他方、我々は、——男性のみならず女性も——、女性性として象徴された要素を集合

的な女性達に投影してしまっている。

では、なぜこれらの要素が女性と結びつけられてきたのか。著者は次のように考えている。まず第1に、これら女性的要素の最初の経験は母と共に始まる。第2に、西洋文化では、母又は養育者としての女性の役割が強調されてきた。そして第3に、女性と強く結びつけられているのは、我々に生命力を与えるイメージの束であり、情緒的・行動的反応であって、それは取り入れられた外的対象（母等）にのみその源を跡づけることのできないもの、すなわち個人や文化、歴史を超えたものである。このイメージの世界は、内的世界と外的世界の過渡的な場所を我々にもたらす。女性の象徴は、この場にこそ所を得、人間存在の重要なあり方を映し出す鏡の機能を果すのである。

著者はここで wholeness という Jung, C. G. が重視した概念に言及している。すべてのものを含むあり方を目ざす wholeness は、価値ある断片を切り捨てて完全を目ざす perfection に対置されるものである。完全を目ざす男性達（勿論ここには女性も含まれる）によって切り捨てられた断片は、それらが彼らの人生を全きものとする為に必要と見なされた時、女性（女性がない時は一部の男性）に投影される。

それゆえにこそ、これら女性的要素は我々を魅了すると同時に、我々の中に根深い恐怖を惹き起こす。この強い恐怖をもたらす女性的要素の内実は何か。著者は女性的様相を表す元型的イメージを考察するうちに、全く異なった観点、すなわちイギリス対象関係論からもたらされた Winnicott, D. W. と類似の結論に至ったという。

Winnicott は、女性的要素として次の3点を挙げている。

- (1) 自己自身の中核にある存在
- (2) 他者と一体であることより始まる存在
- (3) 個人的連続性をもつ存在

著者は、(1)のあり方における傷つき易さと、(2)のあり方において生じる「私」を失うことへの脅威の強さを説き、それゆえにこそ、これら女性的要素は我々

の中に恐怖を惹き起こすと述べている。云い換えるならば、それは自らの存在を受身的で無力な望みなきものと感ずることへの恐怖である。我々はこの恐怖から自己自身を守るために、恐怖を攻撃的な憎しみに変え、また、これら人間に共通の一般的な要素を、特定の女性に投影するという二重の置き換えをして、我々自身からの切り離しを試みるのである。従って、女性や女性的なもの——文字通り「女らしい」もの——、に対する偏見は、根本的には、これら人間存在を脅かす要素に対する巨大な防衛機制として機能しているのである。

さて、著者は、前述の3つの女性的要素を我々が意識に受け入れる時、そこに「他者性」が生まれると述べている。我々は、女性の、生命を育む体験と母子の初期関係の体験から、そこに本質的に内在している他者性の受容ということを学びとる。ここで体験される他者とは、自己と深い関係を持ちつつ、自己とは全く別個の何かである。その象徴的な出来事として著者は出産を挙げている。子どもの誕生は、ただ子どもひとりが生まれるのではない。母もまた共に新しく生まれるのである。それゆえ、出産は行為であると同時に出来事である。子どもの「誕生物語」が、しばしば、母となった女たちによって口伝に語られるのは、このような体験の説明できない深さを物語るもの、すなわち、他者性の神秘を受け入れることを示すものである。従って、他者を認める能力は、母が自分の子どもの他者性を認めることから始まるように思われると著者は云う。

しかしながら、同時に、次のように著者が述べている点を我々は見過ごしてはならない。子どもの他者性は、肉体的なもの以前の精神的な妊娠に基づいており、それは両親のお互いの他者性の受け入れに由来する。ここに著者は父に対して、母を支える以上の重要な役割を求めているのである。両親が子どもの他者性を見損い、家族皆が苦しみに陥る結果になることは少なくない事実である。著者は、そこに以下の2つの他者性の拒否のあり方が存在すると云う。(1)母が意識的には子どもを自分の延長とみているが、無意識的には子どもを余りにも他者として、すなわち脅威として経験している。(2)母は意識的には子ども

を自分と別個の存在として尊重しているが、無意識的には全く自分のパーソナリティの延長として同一視してしまっている。

上述の如く、母をして、子どもの他者性の受け入れを可能にする「父」の存在に言及した著者は、次いで、女性が自らの「権威」を発見する際に、「アニムス元型」がいかに重要な機能を果しているかへと論を進めて行く。アニムスとは周知の如く、Jungが、女性の心の中で働いている男性像に対して命名したものであり、男性の内的イメージとしての女性像であるアニマと対比されるものである。ここで著者は、しばしばアニムスがそれに対応するステレオタイプな内容をもっているかのように誤解されていることを指摘し、アニムスとは、女性の自我と無意識の深い層をつなぐ橋渡しの機能をもつものであることを以下のように強調している。

女性は文化的条件や解剖学的要素から、自分の同一性をとりあえず作る。しかし女性はそれのみに規定されているのではない。アニムス元型が統合されて行くならば、女性の性的同一性は拡大し、そこに男性的な方法での女性自身のあり方や行動の仕方も包含されるようになる。逆にアニムスが機能していない時、女性に生じる典型的な問題は、情緒的取り憑かれ、出来合いの意見への知的同一化、外的権威への盲従、あるいは拒否のどちらかに分裂した権威、いつまでも少女のままであったり、精神的な応答をもたない性的放縦等である。我々はアニムスが女性に与えたいと思っている素材のすべて——意見、反応、忠告、記憶——に焦点を当て、それを意識にもたらすことを学び、同時にまた、我々の感情、望み、価値をアニムスに知らせる必要がある。この二重の焦点づけが我々女性を自分自身の中心へと導くのである。こうしてアニムスが適切に機能することによって、我々は開かれた生を生きることが可能となる。それは更に我々を通して、他の人々に深い権威の源を与える。著者は、これこそマナとしての女性性の元型的イメージであり、肉と霊、人間的なものと聖なるものの混合を生みだす源であると述べている。

しかしながら、この自我とアニムスの関係は、自我の傷つきによってしばし

ば破壊される。この深い傷つきは、直接的・間接的な女性の性的同一性や自己評価への攻撃によって生じる。そして女性一般への差別が更にその傷を膿ませる。この傷を無視せず、はっきりと見、その痛みを感じることによって、我々は自らを十分に受け入れることができる。さもなくば、傷は無意識の中に陥り、アニムスがそれを引き継いで、他者への激しい攻撃や非難が生じる。我々が自分の中の打ち捨てられた痛みに触れる時、それは他者の中の打ち捨てられたものに触れているのである。

このように語ってきた著者は、終章で、「すべての女性は牧師である。」と説く。例えば、聖書の中の3人のマリア達は、イエスについて他の人々の知らないことを直観的に知っていた。すなわち、イエスの身に起こる死と傷つきを予感し、その為の備えをした。この3人のマリアの「女性の知恵」は新しい神学的可能性——神の内在性と超越性の混淆——をもたらすものであると著者は提言している。

以上、著者の観点が Jung の分析心理学を基盤にしたものであることは改めていうまでもない。しかしながら著者は、Jung においては、女性が、その無意識を男性的な精神として経験すると考えられており、それは、女性の心理を、男性心理の単なる裏返しとしてしかみていないものであると批判している。この著者の批判を検討する紙幅はここではないが、いずれにしろ、彼女の主張の強調点は、女性的要素が、男女を問わず、人間の生きる基盤として必要不可欠なものであり、それを映し出す鏡こそが現実の女性であるというところにある。この点において、著者は、女性を男性とは決定的に異なる独自の存在とみなし、両性具有としての男女のあり方を否定するのである。現代日本の占いブームや迷信、新興宗教の熱狂的な信者の増大という社会現象を鑑みるならば、個々の女性の中性化と、女性的要素の集合的な女性達への投影とが、全く無縁ではありえないことを、我々は改めて思い起こさせられるであろう。

ところで、我々は、ここで大きなジレンマに陥らされる。著者は、一方で、女性的なものとして、女性に結びつけられて来たものの因って来たところと

その内実を明らかにし、それを女性から引き離すべく試みてきたのであるが、他方、今や、それを女性にしっかりと結びつけている。しかし、正にこのジレンマこそ女性の「現実」である。著者は、それらを一度女性から切り離し——このことの意義は強調しても強調しすぎることはない——、そして、人間存在の根源におくことによって、そのことの重要性を明らかにし、その上で、それを担っている者としての女性に対する認識をもたらそうとしたのであろう。それゆえにこそ著者は次のように強く主張している。「我々自身の存在の中核において生き得る基礎が早期の母子関係にあるという事実を意識にもたらす時……中略……女性が子どもを支えている間、社会が女性を支えるべきだという原理が生まれる。」

しかし、他に道は本当はないのであろうか。それを女性に引き戻すしか道はないのであろうか。女性的要素として著者があげた3つの点——(1)自己自身の中核にある存在、(2)他者と一体であることより始まる存在、(3)個人的連続性をもつ存在——の意味するところを、我々は、更に深く検討してみる必要がありそうである。ここで、著者の最後の結びの言葉の中にある paradox に注目しておきたい。著者は次のように結んでいる。「我々は、まさしく存在を受け入れているので、それを覆われたものとして見、隠されたものとして受け入れ、そして、触れ得ないものに触れ、見えないものを見ることが出来る恵みを認識する。」ここにあるのは非常な逆説である。つまり、我々が見る時、それは覆われたもの、我々が受け入れる時、それは隠されたものなのである。従って、著者のあげた3つの女性的要素は次のように云い換えられねばならない。我々は(1)中核にないものとして中核にあり、(2)他者と一体でないものとして他者と一体であり、(3)個人的連続性をもたないものとして連続性をもつ。

この道は誠に厳しく、険しい道である。心理療法過程とはこの道の模索であるように思う。我々心理療法家のもとを訪れてくる人たちは、Ulanov の挙げた3つの女性的要素を、真摯に、——しかし、症状の奥底に、彼らの意識にすら隠された形で——追求している。我々は彼らを通して、これら3つの女性的

要素が、いかに人間のあり方の本来的なものであるかを知らされるのである。しかしながら、それらは、正に余りにも純粋な形のものであるがゆえに、我々が人間として生きている限りは、そのまゝのものとしては決して実現されえないものである。従ってこれらを熱望する自らの思いを意識にもたらし、凝視しつつ、同時に、その思いをそのまゝでは実現しえないものとして葬らねばならない。ここに生じる人間としての深い悲しみを共にするのが心理療法家であると云ってもよかろう。この道は、著者の云った女性的要素に対する真の洞察があつてこそ可能である。さもなくば、そこには、空しい疎外状況しか生まれまいであろう。